



年間第 18 主日 (ルカ 12:13-21)

神の前に豊かになるために

年間第 18 主日 C 年は「愚かな金持ち」のたとえが選ばれました。「神の前に豊かになる生き方」とはどのようなものでしょうか。わたしたちはどんな生き方をすべきでしょうか。

夏休み中は朝 6 時のミサ後にラジオ体操をしています。「頑張ってきてくれた子供たちには史上最大のプレゼントをあげます」とお知らせしたのが効いたのか、よく頑張ってきて来てくれています。まだ来てない子供たち、一度は来たけれども挫折してしまった子供たち、まだ夏休みは一ヶ月ありますから、どうぞ来てください。「史上最大のプレゼントを確かめたい」とお父さんお母さんをお願いしてみてください。

福音朗読に戻りましょう。金持ちが登場します。畑が豊作だった時、「もっと大きい納屋を作り、もっと穀物や財産をため込む」ことを考えました。自分の持ち物ですからどう使おうが勝手ですが、少なくともこの金持ちの行動は神には「愚か」に見えたということになります。

お金を使えば財布の中身は減りますし、食べ物を消費すれば保管していた倉庫に空きができるでしょう。もろもろの活動で空間ができた時、その欠けたところをどのように満たすか。この差が「愚かな者」か「神の前に豊かな者」かの分かれ目になるのです。

ではわたしたちは何によって自分の欠けたところを満たせばよいのでしょうか。今月旅立っていった一人のシスターを紹介しますので、彼女の生き方を例に考えてみましょう。そのシスターの名前は小林三枝と言って、わたしが小学生のころ、郷里の鯛之浦教会で奉仕しておられてお世話になったお告げのマリア修道会のシスターです。

小林シスターはわたしにとって大恩人のシスターです。生まれたとき助産師に取り上げられた人たちは、その助産師さんを「この世に取り上げてくださった方」として恩を感じることでしょう。そのように、小林シスターは、わたしが司祭職への道を意識していない頃からわたしに声をかけ、司祭職への道に取り上げてくださったのでした。

当時わたしは小学 4 年生くらい、小林シスターは堅信組のけいこを担当していました。当時は一問一答形式でまとめられた「公教要理」という本で学んでいました。先生役の小林シスターが問題を読んで、生徒のわたしたちは答えを繰り返して暗唱するという勉強でした。

記憶力がよかったわたしは、答えを暗唱するだけの勉強が次第に退屈になり、勉強会に行かなくなりました。その時間はカトリックでない友達と小学校のグラウンドで遊び、カトリックの友達の勉強が終わるころに示し合わせて自宅に帰ることを繰り返していました。

堅信組は学期ごとに主任司祭の試験がありました。試験はいつもその場を切り抜け、のちに長崎の神学校に入学しそこで堅信式を受けます。小林シスターは勉強会に来ないわたしをずっと心配していたはずですが、もしかしたら、ずっとわたしのために祈っていたかもしれません。旅立ってし

まい、もはや確認できませんが、まじめに勉強に来ている子供たちよりも、ある意味、心の中で気にかけてもらっていたかもしれないのです。

堅信組に加わるころ、けいこに来ないわたしに小林シスターは「侍者」をさせました。そば近くで司祭がミサをささげているしぐさを見て、司祭へのあこがれを持つように願ったのでしょう。侍者デビューするまで小林シスターは付きっきりでミサの時の動作を教え、指導してくださいました。

6年生になると身長が伸びて、小学生用の侍者服が入らなくなり、中学生用の侍者服を着なければならなくなりました。小林シスターはこの中学生用の侍者服をわたしに着付けさせながらこう言ったのです。「小学生でこの中学生用侍者服を着た子供は誰もいない。だからあなたは、神学校に行きなさい。」長崎の学校は丸刈りにしなくてもよいとも聞いていたので、これ幸いと思い「神学校に行ってみよう」と思ったのです。

付きっきりで面倒を見てくれた小林シスターのおかげもあり、わたしは長崎の神学校に入り、何とか司祭になりました。前任地の浜串教会に赴任した時です。偶然にも小林シスターの妹さんが、山口さんという人と結婚して住んでいました。山口さんから、姉小林シスターは歳を重ね、静かに晩年を過ごしておられると聞き、思いきって訪ねることにしました。

訪ねてみてびっくりしました。小林シスターは認知症を患い、会話の途中何度も「中田神父様は、いまどちらの教会ですか？そうですか。浜串教会でしたか」「中田神父様は、いまどちらの教会ですか？そうですか。浜串教会でしたか」と繰り返しているのです。

小林シスターは、間違いなくわたしを司祭職への道に導こうと、人々の中から取り上げてくださった恩人です。少しは自慢しても、誇ってもいいはずなのに、小林シスターは記憶を失い、ご自分がわたしを司祭職の舞台に上げてくださった恩人であると思えなくなっていたのです。

記憶が欠けてしまい、記憶を満たそうと繰り返しわたしに尋ねますが、満たされません。しかしシスターを満たしてくださる方はほかにおられるのです。聖書の次の言葉を思い出しました。「右の手のすることを左の手に知らせてはならない。」(マタイ 6・3) 徹底的に、わたしのためにしてくれた施しを「隠れた施し」にして天国に旅立って行った。小林シスターの欠けたところは、神がすべて満たして下さっているはずです。

わたしはこのシスターの生き方を振り返りながら、自分の欠けたところを神に満たしてもらい生き方は尊いと、改めて思いました。この世の活動はすべて、自分の持ち物を使い、減らしながらの生活ですから、何か欠けていきます。その欠けたところを、この世のもので満たすのではなく、神に満たしてもらい生き方が、神の前に豊かな生き方です。

心と体の欠けた場所がある。欠けていると感じる。その時こそ、神に欠けたところを満たしてもらいまたとないチャンスです。何によって満たそうとするかを誤ることなく、神の前に豊かになる道を選びましょう。そのための知恵と照らしをこのミサで願いましょう。